

車いす体験で学んだこと

大福小学校5年

重光 祐陽
しげみつ ゆうひ

ぼくのお兄ちゃんは、足が不自由なので、車いすで生活しています。ぼくが生まれた時から、お兄ちゃんはずっと車いすに乗っているの、ふつうに見ていました。

お兄ちゃんと遊ぶ時は、お兄ちゃんをびっくりさせようとして、車いすを急に動かしたりしていました。お兄ちゃんは怒らずに、いつも優しく、

「車いすを大事にあつかわないとダメだよ。」と、言って、注意していました。ぼくが、車い

すに乗ろうとすると、
「大事に乗ってね。」

と、いつも言われます。でも、ぼくは自転車のように、遊びながら乗っていました。

ある日、学校から車いす体験の案内をもらいました。ぼくは、

「いろんな車いすに乗ってみたい。」

と思い、すぐ申しこみました。

「どんな車いすがあるのかな。楽しそうだな。」と、楽しい気持ちでいました。

車いす体験の日、たくさんの高校生が教えてくれました。

最初、車いすの広げ方、たたみ方を習いました。お兄ちゃんの車いすで今までした事がなかったの、車いすが折りたためる事に、びっくりしました。せまい所でも、車いすが置けるように、工夫されているなど、感心しました。

次は、車いすの介助の仕方をくわしく習いました。車いすのおし方は、ゆっくりと、お

していくように言われました。ぼくは、お兄ちゃんをおしていく時は、早く行きたいので、急いでおしていました。ぼくが車いすに乗って、おしてもらった時、少しこわかったので、乗っている人の気持ちを考えないといけないなど、思いました。

一番こわかったのは、だんを上がったり、おりたりする事でした。ぼくが車いすに乗って介助してもらった時、だんを上がる時は、体がうくような感じになりました。だんをおいる時は、体が落ちるような感じがして、びっくりしました。その時、お兄ちゃんの気持ちが分かりました。お兄ちゃんは、いつもドキドキしながら車いすに乗っているのかもしれないと、初めて思いました。

最後に、だんを上がったり、おりたりする介助の仕方を習いました。だんを上がる時、ティップングレバーをふみますが、思ったよりも軽くふむ事ができました。でも、だんに後輪をおし上げる時は、とても力が入りました。

た。高校生から、

「自分の体重を、前におしてあげると、あまり力を入れなくてもできるよ。」

と、アドバイスをありました。だんからおろす時は、車いすに乗っている人がびっくりしないように、ゆっくりと後輪をおろす時が、とても力が入りました。高校生から何回も、「車いすをゆっくり動かしてね。」

と、注意されました。ぼくは今まで、お兄ちゃんの気持ちを考えないで、介助していたなと反省しました。

車いす体験に参加して学んだことは、車いすに乗っている人の気持ちを考えて、介助する事です。声かけをして、安全確にんもして、車いすをゆっくりおしてあげる事が、大事だと分かりました。

お兄ちゃんは、時々車いすをみがいっています。

「ぼくにとって、車いすは大事な足だからね。」と、言っていました。お兄ちゃんは、車いすの

おかげで、楽しく生活ができています。

お兄ちゃんが、一生けん命がんばっているすがたを見ると、ぼくもがんばらないといけない、こまっている人を助けてあげたいという気持ちになります。

だれもが思いやりをもち、助けあえる社会になってほしいです。

入選

優しさを与え合える友達になろう

馬田 小学校6年

堀内航ほりうち わたる

ぼくは、「優しい」と、よく言われる。でも、優しいことは良いことなのだろうか。それとも悪いことなのだろうか。ぼくには、よく分かんなくなった事があった。

ぼくは、今年の5月から、新しいバスケットチームに入る事になった。ぼくは、やっぱり、「優しい」と、言ってもらえて、すぐに友達ができた。しかし、プレーにどうやらぼくの優し

さが出ているらしく、すぐに友達にパスをしなくなり、ボールが回ってくればドキドキする。母からは、

「もっとガツガツ行けよ。」

と言われるし、他の保護者からは、

「わたる優しすぎ。」

と、言われる。ぼくは、優しいことが良いことなのか悪いことなのか分からなくなった。優しい事で友達はたくさんできたけれど、どうやらプレーではマイナスらしい。

そんなある日、やっとぼくも休める日が来た。その日は、バスケの練習が休みだったのだ。

ぼくは、いつもゲームをしている友達とゲームをすることになった。ぼくは、とても楽しみにしていた。けれど、事件が起きた。ぼくがバスケットボールの練習をがんばっていた間に、チーム仲間のゲームのうでが上達していた。ゲームの途中、ぼくは、仲間から

「なんでそんなもできないの。」

と、言われてしまった。ぼくは、何だか頭にき

た。あんなに楽しみにしてきた仲間たちと遊ぶ日だったのに、嫌な気持ちになってしまった。ぼくは、言い返したかった。

「楽しみにしていた日だったのに、何で、そんなこと言うの。」

でも、ぼくの優しさがじゃまをして、言い返すことができなかった。気分がもやもやした。そのことに母はすぐ気づいたようだった。母は、帰宅するなり、ぼくの顔を見て、

「何か、今日あったやろ。」

と、言ってきた。ぼくは、今日の事を話した。すると、母も言った。

「優しいことは、良いことか悪いことか分からないね。でも、たまには、自分を守らないとね。」

ぼくは、バスケットボールが好きだ。チームプレーでお互いを思いやれるからこそ、強くなるとぼくは考えている。バスケットボールでできた友達も好きだ。ぼくが失敗しても怒らないし、良いプレーが出来た時はほめてくれ

る。ぼくも優しさをもらっていることに気づいた。でも、プレーでは、もう少し強い気持ちも持ちたいと思う。ゲームをする仲間とも、今ではすっかり仲なおりすることができた。ゲーム仲間も大切な友達で好きだ。でも、相手の事を本気で考えたら、本音で話し合うことが大切なのではないか。それが優しさを与え合うことなのではないかということに気づくきっかけにもなった。

ぼくは、これからも優しくありたい。そして、友達に優しさをたくさん与えたい。友達からもたくさんのおしさをもらいたい。優しさを与え、与えられる関係をみんなが築けば素敵な社会になると思う。

今、ぼくは自信をもって、「優しい」ことは素晴らしいことだと言える。そして、「優しい」と言われる自分自身に自信を持ちたいと思っている。

その「いじり」は本当に冗談ですか

馬田小学校6年

うちやま りんか
内山 凜香

「冗談」「いじっただけ」その言葉に、何度救われた人がいるのだろう。けれど同じくらい、その言葉に傷つけられた人もたくさんいる。

最近、学校やSNSで「いじり」という言葉をよく耳にする。友達同士でからかい合うのは、仲の良さの表れかもしれない。でも、冗談やいじりが「いじめ」に変わるのは、とて

もかんたんなことであると思う。

たとえば、昔ある友だちがアトピーのことに
ついてからかわれていた。「Aちゃんの体って
なんでぶつぶつがあるの」笑いながら言われ、
周りも同じように笑っていた。その子も笑っ
ているように見えた。でも、その日からその
子はなんとなく半ズボンをさけたり、夏でも
上着を着ているような事が増えた。あの時
の笑いは、本当に楽しいものだったのだろう
か、本当に、冗談で済んでいたのか。いじる
側にとっては「ただのノリ・冗談」「場を盛り
上げようとしただけ」かもしれない。でも、言
われた側がどう感じたかが大切だ。人はそ
れぞれ、心のいたみの感じ方がある。ふざけ
て言ったつもりでも、相手の心にはずっと残
ってしまっているかもしれない。

いじめは、なぐったり、おししたりするだけ
ではない。言葉も、いじりも、冗談も、人を
傷つける「言葉の暴力」になりうる。だから
こそ、私たちは「これは本当に笑っていい冗

談なのか」「相手も楽しんでいるのか」「自分
歩だと思う。

自身に問いかける必要がある。誰かを笑い
ものにしてまで生まれた笑いは、やさしさの
ない笑いだ。本当に楽しい空気は、みんなが
安心して笑える空気のことだと思う。もし
誰かがその場でだまりこんでいたら、笑えて
いなかったら、それはもういいじりとは言えない
のかもしれない。

もし、人を傷つけるつもりがなかったとして
も、傷つけてしまったのなら、それは、はんせ
いすべきことだ。言葉は、人をはげます力
にもなれば、心に大きな傷を残す凶器にも
なる。

だから私は、言葉を使う時に「冗談だから」
と済まさないようにしたい。友達だから、仲
がいいから言ってもいいとはならない。相手の
気持ちになって考えながら、発言や行動を
することで、それぞれの人を尊重し、安心し
て楽しくすごせる場所を作ることができる。
それが、人権を大切にすることの一

でっかばあちゃんからの平和のバトン

甘木小学校6年

上野うえの 恭介きょうすけ

吉井のでっかばあちゃんは九十三歳です。昭和七年生まれなので、戦前、戦中、戦後を生きぬいてきました。

でっかばあちゃんはいろんな話をしてくれます。ぼくが、
「どうして、でっかばあちゃんは、すいかがきら
いと？」

と聞くと、

「ばあちゃんのうちやまが、すいかをポーンとなげてくさ、わらんよーに取らにやいかんとたい。もしわったら、えらいこつがられよった。」

と言っていました。すいかを見るたびに、それを思い出すので、あまり好きじゃないそうです。ぼくは、えー？と思いました。

とくに戦争の話はびっくりすることが多かったです。

空に向かって、竹やりをつく練習をしていたり、エンジンの音でB二十九かどうか聞きわけの授業があったり、今では考えられないことがあたり前に行われていた時代だったそうです。

大刀洗で空しゅうがあった時には、でっかばあちゃんのお父さんが二十日後に馬と帰ってきたと聞いて、今まで空しゅうという言葉が遠いところの話だと感じていたのに、こんな身近にあることが分かり、急にこわくなりました。

ひいじいちゃんも、戦争に行く直前に終戦をむかえたそうです。もし、ひいじいちゃんが戦争に行っていたら、ぼくらは産まれてこられなかったということです。ぼくは、命のバトンがつながっているけど、戦争で亡くなったたくさんの人の命のバトンが戦争によってうばわれたのです。

でっかばあちゃんの家には、ひいじいちゃんのお兄さんの遺影がかざってあります。そこには、「フィリピン沖で戦死」と書かれてありました。遺骨はもどってこなかったそうです。でっかばあちゃんが僕たちに伝える当時の話の裏には大きな悲しみやつらさがかくされているのだと感じました。

今、世界のいろいろなところで、戦争や紛争が起こっています。核兵器は世界に約一万二千発もあると言われています。今、平和主義をかける日本でも、唯一の被爆国であると同時に、他国を侵略し、そこに生きる人々の文化や歴史をうばってきた

過去があります。でっかばあちゃんも、ひいじいちゃんのお兄さんも、戦争で亡くなった人々も、日本兵によって殺された人々も、みんな戦争の被害者です。今も昔も、戦争の被害者は、いつも、ただそこに住んでいるさんの罪もない人々なのです。

日本では、憲法九条の議論が行われているが、ぼくは、あの悲劇を二度とくり返さないために、戦争に向かつてはいけないと思う。日本が戦争の被害者に、いや加害者にならないために、今ぼくたちがすべきことはなんだろう。そんな時、となりにいたお父さんがこう言いました。

「深く、深く、勉強することだよ。戦争にかくれている本質は、国益・宗教や思想の違い・歴史的因縁なんやぞ。そこをきちんと見極めないと戦争を止める力はないんだよ。いんだぞ。だから、勉強が大事なんよ。恭介、しっかり勉強せい。」

ぼくはまだ知らないことが多くあります。

分からないこともたくさんあります。ある朝鮮人の言った言葉で、

「歴史を知らずして、あく手はできない。」

ということをお父さんに聞きました。他の国と仲良くしようとする前に、ぼくたちは歴史をさまざまな角度から学ばないといけないと強く思いました。でっかばあちゃんや、お父さんから受け継いだ平和のバトンを次の世代につなぐためにも、ぼくはしっかり勉強して、平和の思いを受け継いでいきます。